

NO. 16 1995. 7

(株)九州地域計画研究所



唐津市の商店街で見つけたベンチです。木の肌ざわり、おもしろい形、とちょっといい感じでした。

も く じ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. やぶにらみ九州論11 知恵を売る屋台村ができないか
自立しながら相互にささえあい、協同することの好さが出せる組織は
6. “花より酒・自慢話より饅頭”でおしゃべり交流に熱中 第3回よかネットパーティ
10. 「地域社会と教育」をテーマに研究発表 地方シンクタンクフォーラム

〈近 況〉

11. まちのドクターになることが再開発の仕事 再開発事業基礎講座
12. 私の近況／電車の中の風景1～おじさんは注意し、無視された～ ④電車の中の風景2～おじさんは注意し、喧嘩が始まった～ ④大牟田市で「うらしま太郎」研修会開催 ④能古島の空の下で鶏が元気に走っていた

〈見・聞・食〉

14. 食場日誌
14. “ワンポイント・ナウ”をつくりました
15. 日田・湯布院・上津江 おいしいもの三昧

〈本・BOOKS〉

15. 「21世紀をめざす世界の教育—理念・制度・実践」 権藤與志夫編著
16. 「おばあさんの植物図鑑」 文・斉藤政美 語り・椎葉クニ子

知恵を売る屋台村ができないか

自立しながら相互にささえあい、協同することの好きが出せる組織は

〈1. 「会社」は社会の反対である〉

「会社という字は社会という字をひっくり返す＝上下をさかさまにして表す」ということに気がついたのは、1989年頃のことである。

たしか異業種交流会の席だったように思うが、親しいという関係ではない知人だったが、「ファイナンスやれば、損は絶対せず、必ず儲かるというのに、それをしない経営者というのは会社に対する犯罪者だ」というような言葉を、いくらか興奮した口調で私に話しかけてきたことがある。おそらくその時の彼は、いくらか親しみをこめて、自分の仕事に誇りをもちながら、現下の経済の状況について私に語りたかったのだと思う。しかし私は、呆氣にとられて言葉のつぎ穂を失い、会話がうまくつながらなかった。こんなことを本気で思っている人がいることさえも、私にとっては信じがたかった。彼の説明は証券会社が「絶対損はさせません」と言っているし、儲かる以外のことは考えられないということであった。したがって、手持ちの資金や新たな借入金をつくってでも、ファイナンスで稼ぐべきで、コストがかからなくてリスクの全くない仕事をするので、自分も大きい稼ぎに参加しているということを話したがっていた。

私は丁度その頃、ある県のリゾート計画をやっている、孤立に追い込まれつつあった。

民間のデベロッパーやゼネコンなどの事業参加者は、「ゴルフ場やリゾートホテル、マンションなどを入れよ」というのだが、私は「こんな離島にそんな

大規模なものをつくってどうするのですか。あなたは自分で来る心算になれますか」といって地域資源活用型の地道な計画にもっていこうとしていた。それに対して役所の人たち（町の人たちは別で、主に県や国の人たちだった）も含めて、「どこの計画でも、もっと大きい絵を描いているし、会社で説明するとき投資額が小さすぎて格好がつかない」といって責めていたのである。社会の中で自分がどう思うかということぬきに、会社が全ての価値判断や方針決定の基準となっている。

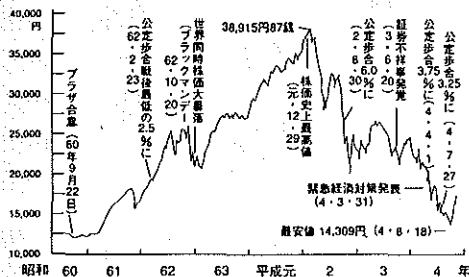
そんな時にファイナンスの話聞いて、「結局、会社は社会の反対なんだな」と思った。

資金運用というものには、もともと全員勝ちはありえない。株が一方的に上昇しつづけるという前提条件（本来ありえないこと）がくずれたら、各方面に後遺症を残しているし、リゾート計画についても、あわてて土地売買をしたところでは、地元とデベロッパーの双方に問題を残している。

〈2. 皆が社会の中で働くような仕事は？〉

九州には「ウエスト」というロードサイドの飲食店がある。私のはじめて見たのが15年ぐらい前のことだったと思うから、ずい分古くからあるのだと思う。

この店の特徴は、1ヶ所に多くの種類の飲食店舗（たとえばうどん、そば、ラーメン、すし、定食屋、コーヒーなど）を出店し、駐車場などを共用しながら経営していることである。つまり個別店舗は「ウエスト」にテナントとして出店した自立経営者である。



東証の平均株価（「経済指標のかんどころ」より）

もうひとつ直方市に「びっくり市・明治屋産業」という大規模店がある。この店の成立過程は極めて風変わりである。

そのプロセスを追って書いてみると、①もともと明治屋産業は単なる食肉問屋であったが、②近隣の人たちから分け売りをしてくれといわれて、少し分売していた。③ところがその要求がだんだん拡がって客がふえてしまったので、仕方なく土曜だけ小売りをするようになった。④ところがそれでは追いつかず、土・日営業になり、その集客力を見込んで八百屋、魚屋、加工食品、雑貨屋などが敷地内に道路ばたの青空店舗のような型で立地しだした（これは明治屋産業という食肉問屋の了解のもとに出店しているのであるが、テナント料は取っていないということであった）。⑤さらに発展して駐車場を整備し、子供のための観覧車、メリーゴーランド、遊園地用モノレールなどの遊び場までできた。⑥今では金・土・日の3日営業になり、数百席のラーメン食堂から酒のディスカウント店、生鮮3品の店、大型雑貨店まである巨大ショッピングセンターとなっている。

この「びっくり市」の発展の原動力は、常にそれぞれの個店が全体のシステムを活用しながら自己責



豆腐もあります……ビックリ市に入って

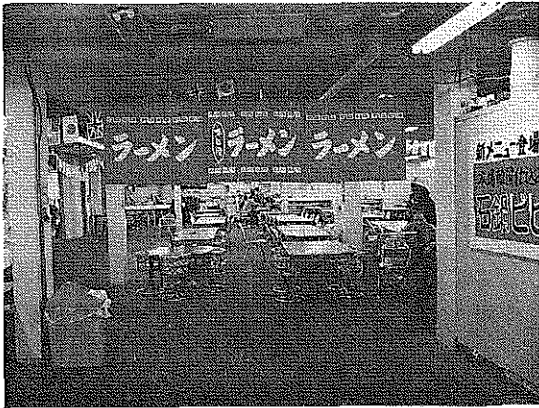
任で運営されていたことにあると考えられる。驚くことに、この店群の中にバス停までできている。駐車場の面積もすごく広い（1,000～2,000台はあるように見えた）。

〈3. 自己とは何かー「免疫の意味論」を読む〉

突如話がかわるようで恐縮だが、「免疫の意味論」という本の話を書きたい。

冒頭に出てくる象徴的な話を紹介する。受精後3～4日のニワトリとウズラの卵の胚の神経管の一部を入れ替えてしまう実験がある。この神経管から胚神経系、脊髄、運動神経、網膜などが出来てくる。さらに腕神経叢に相当する部分などをも入れ替えると、ウズラの神経管を持ち黒い羽根の生えたニワトリができる。いわゆるキメラである。このキメラは胚がウズラであるので、ウズラの命令に従うかということ、そうではない。

この「ニワトリは羽根を動かし摂食し、正常に成長するが生後3週間から2カ月もすると、まず羽根が麻痺してぶらさがり、歩行も摂食もできなくなる。やがて全身の麻痺が進行し、衰弱して死ぬ。ニワトリ



ラーメンを食べてひと休み（ビックリ市）

の免疫系が、ウズラ由来の神経細胞を“非自己”の異物として認め、拒絶するからである。」という言葉にショックを受けた。免疫系というものが自分の生命をかけて異物を拒絶している。このことは脳にだけ命令権があるのではなく、身体各部分にも自主的判断力を備えているということを示している。

この話を前述のショッピングセンターになぞらえると、店舗群にとっても、実態に合わない命令系では個別の店舗の活動がうまくいなくなり、全身が麻痺してしまうかもしれない。

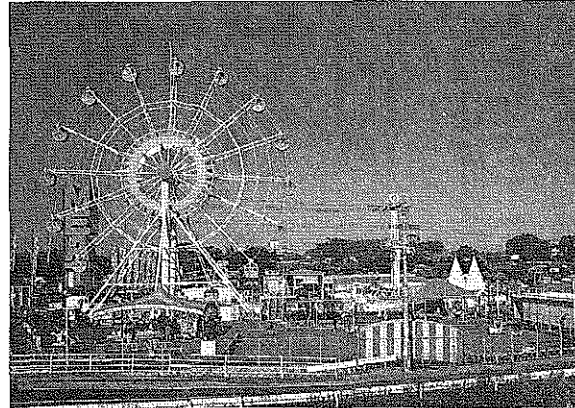
たしかに最近、全国展開をしているレギュラーチェーンの大型店でも、全体としての営業効率が悪く、閉店を余儀なくされている例が多い。

これからは、自己の主体性を相互に認め合うような社会システムの時代なのかもしれない。

〈4. 多様な人たちが参加できる

“知恵の屋台村づくり”

高齢社会というと、「面倒みなければならない高齢者が多くて困る社会」というように、短絡して受けとられてしまいがちだが、それ以前にもっと大きい



一日中でも遊べます（ビックリ市）

問題がある。

最近私の周辺で、50才になったばかりで退職してしまう人が多くなっている。退職金を割増で受けとるので、将来は「悠々自適」でやっていけるのかもしれないが、「悠々自適」できるぐらい金を払うということは、その人がそれにふさわしい能力をもち、仕事をしてきたということでもある。また、本当に働く必要があり、能力を持っている人もいると考えられる。これらの人たちの能力は、もともと社会全体で育ててきたもので、会社というひとつの組織にとって使えないからといって放置されてしまうということは簡単には納得がいかない。

ところが現代の日本の社会システムでは、会社などの組織に属しないと自分の能力を売ることができないようになってきている。

ここで問題になるのは、“知的サービス”という商品は、能力をもつ個人が、社会の中で直接売ることができなくて、会社というようなある意味では反社会的な組織のラベルをつけることによって商品化できるということである。したがって、このようなブ

ロセスから生じるサービス提供の価格は、知的サービスの品質ではなく、組織（会社など）の大小や知名度というブランドで決まることになる。

しかしこれもまたやむをえない意味を持っている。品質の極めてわかりにくい、サービスという商品の購入者は、品質保証をどこかに求めなければならないからである。

そこでひとつ私の提案というか妄想というかを述べたい。それが“知恵の屋台村”である。街にある屋台村は、①あくまで個店が自己責任で経営し、②他の店舗と競い合うことによって一層集客力を高め、③駐車場やテーブルなどを共有して経費削減につとめている。問題は、ある個店が食中毒などを出すと、全店舗に悪影響を及ぼすことである。そういうことさえなければ、店を持ちやすいし、経営の基盤があるので営業を軌道にのせやすい。

これと同じようなことが、知的サービス分野でも考えられないだろうか。50才で役所を退職した設計の能力のある人、40才で自立しなくなった人、70才になっているがまだ人の役に立ちたい人など、多くの人の拠点になるような“知的サービスの屋台村株式会社”ができないだろうか。

生活のためには生活協同組合があるが、ここで考えているのは知的サービス協同組合である。組織形態は株式会社にしておく方が簡単かもしれない。組合よりフットワークがいいように思う。

多くの人たちが、仕事を楽しみながら生きていくことができれば、社会的教育投資が生きることになるし、若い人たちの税金を高くすることもさげられると思う。

ところで、私たちの事務所を、全所員と相談しながら“地域づくりの屋台村”として名乗りをあげる

ことにしました（下記）。それを会社案内にも載せようと思っています。どこまで実体がともなうようになるかわかりませんが、とにかくやってみようと思っています。

（糸乗 貞喜）

私たちは“地域づくりの屋台村”をめざします

“屋台村”の特徴は、「多様な店が思い思いの特徴を活かして店を出し、それぞれの店がまとまって村をつくることによって、お客様により一層のサービスを提供する」ことです。

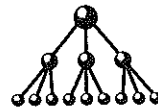
“屋台村”は、近代合理主義を超えた、ひとつの新しいネットワークシステムのように思います。今まで、企業は一元的管理によるツリー（木）型の体系で、幹があって枝分かれして、ピラミッド型の命令系統で業務が行われるように考えられていましたが、私どもは個性が活かされやすいラティス（格子）型の体系、もしくはアメーバ型のシステムとしての“屋台村”を目標としたいと考えます。

このシステムは、個店の内部でも、村としてでも、分業が行われますが、個店が自立性を持つことによって、単なる上意下達型の組織ではなく、各人の工夫があらゆる段階に出しやすくなり、全体として顧客本位のサービスシステムにしやすくなると考えます。また、お客様のニーズに対応した業種の調整、個店の新業種へのチャレンジなどが行いやすくなっています。それは全体として顧客を維持していくことにもつながります。

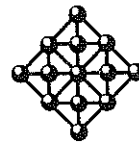
私たちの事務所は“地域づくりのための知的サービス業の屋台村”をめざします。私たち所員は、自分の個店をこの事務所内にもつように努力します。もちろん、力のないうちは「仕込手伝い」だったり、「フロアサービス」だったり、「レジ係」だったり、「帳簿係」だったりしますが、その中でも自分の腕をみがき、プロとしての商いを行うように努めます。

（九州地域計画研究所）

（ツリー型）



（ラティス型）



“花より酒・自慢話より饅頭”でおしゃべり交流に熱中
第3回 よかネットパーティ

今年もにぎやかに“よかネットパーティ”を開かせていただきことができました。“人と人との出会いの場”になればと思って続けているのですが、今年の状況からみると、もう私どもの事務所で行うのは限界にきているかなと思いました。会場が狭いのです。ところが、今年は昨年よりはるかに多く、北は北海道から南は沖縄まで、珍しいものを送っていただきました。何の予告もなく当日の朝に「ドン」と届いて慌てたりしました。

現実的にみると、私どもの小さい事務所で主催する限界を超えつつあるように思えるのに、いよいよ多くの方々的心づけが集まってくるようになって戸惑っています。

参加していただいた方にはわかっていただけていると思いますが、参加者は入ってくるなり、飲んで食べてをしながら、しゃべり交流に熱中してしまって、事務所がワーンといった騒音の巷と化しており、物産の紹介をしようとしても、全く聞いてもらえませんでした。これも狭い事務所のせいかなと思っています。来年は何か方法を考えねばと思います。よいアイデアがあればお教えください。

〈皆様のおかげです——たくさんの特産品〉

今回の特産品93品のうち、所員でとりよせたものは21品だけで、あとは送っていただいたもの、推薦していただいたもの、当日お持ちいただいたものです。「パーティには参加できないが、これを是非皆さんでどうぞ。」とご自慢の品を送っていただいた方もあり、本当にうれしく思っています。当日もたくさんの方々がおもしろい品や楽しい品をお持ちくださって、パーティはいっそうにぎやかになりました。

会場で人気投票を行ったところ、なかなかの成績だったのが、地鶏のくんせい、麩まんじゅう、壱岐の豆腐などでした。当事務所の手作り燻製にも丸印をつけていただいていたのですが、これは、ご祝儀というところでしょうか。

次回もおいしいものはもちろんですが、楽しい話があるもの、ちょっと変わった物など、皆様のご協力をお願いします。
(富重 慶子)

〈“うまいもの”自慢大会〉

3回目を迎えた今年のパーティでは、当日、何人かの人に自慢してもらうようにパーティの半ばに時間をとり、事前をお願いしていた人にうまいもの自慢をしていただいたのですが、ほとんどの人は「話より団子」、「自慢より饅頭」、「前の人の話より隣の人の話」というようにまともに聴いていた人は少ない状況でした。結婚式の披露宴で宴たけなわになって挨拶するのに似た状態でありました。この種のパーティとはこのようなものなのかも知れませんが、しゃべる方は大声を張り上げていくしかないようです。「手前みそ」にはなりますが、自慢話の中で「私の自家製の燻製は御利益のある燻製で、なぜなら隣の天神様の境内で作らせてもらったものだから、食べると御利益ありますよ。」といった途端に、私の前に立っていた人たちはぞろぞろとこの天神燻製を食べるため移動しはじめたではありませんか。やはり神



にぎやかにおしゃべり交流中

がかりは強いようです。

あと反省点としては、ホスト・ホステス役である所員一同、事前に特産品を食べていなかったため、来られた方に「これは美味しいですよ。これは変わった味ですよ。」といったように案内できなかったことが悔やまれます。次回からは、しっかりつまみ食いをしておこう。 (山田 龍雄)

〈パーティ会場でインタビューしてみました〉

受付にいましたので、いろんな方がコップ片手にやって来られて、雑談混じりに今年のパーティーの感想を話してくださいました。

いろいろお聞かせ頂いた意見のうち印象に残ったものをいくつか拾ってみました。

「去年は男しかおらずみんな殺伐と酒を飲んでいただけ、今年は意外に若い女性が多くて（何歳位の人を指しているのかわからない）華やいだ雰囲気だった」というのは2年連続参加の女性からの感想。

確かにこのパーティー、女性が表に立ってコメントする機会がなくて、どちらかというと中年男性が主役の「男っぽい」雰囲気。来年あたり女性が主役に



恒例となった“博多にわか”

なるコーナーなど募ってみてもいいかもしれません。「今日はじめて知りました。行きつけの店の女将さんから呼び出されてついて来たのです。おもしろい人が多かった。ええ、もちろん来年も参加します。」というのは、真っ赤な顔でお帰りになった同じ天神1丁目にある会社の課長さん。

人が人を呼んで、知らない人と知り合う……パーティーの理想型をみたような気がします。

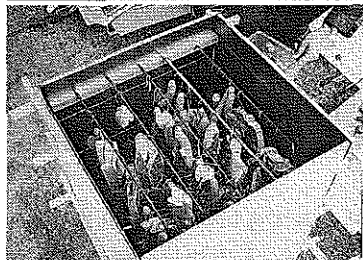
「名刺を壁に貼るのはいいけど、よく見ると同じ人の名刺が5種類もあったり、変わった名刺をお持ちの方がいたりして、何ですか、あれは？」という意見もありました。

誰が参加しているのか当日リアルタイムでわかるようにと今年から掲示したのですが、評判は良かったようです。

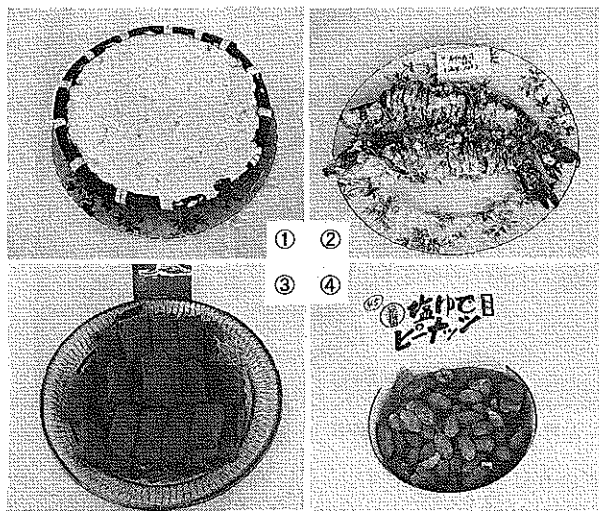
その他にも、パーティーの場で親しくなった方々が「来年この場で逢うまで」と再会を期して握手で別れるような場面や、気に入った特産品を自分でも欲しくなった方が、持ち込んだ人にお店の紹介をせがむ場面などがみられ、過去2回のパーティーとは少



〈写真左〉
上：燻製材料
下：手作り燻製箱



〈写真右〉
①：ざる豆腐
②：馴れ寿司
③：柿の葉寿司
④：塩ゆでピーナッツ



し違って、お客さん同士の勝手な交流がみられるようになり、うれしく思いました。（尾崎 正利）

〈続・博多にわか体験記〉

昨年に引き続きやる博多にわかに参加することになりました。去年やっているだけに今年はさらに気の利いたものをと意気込んでネタを考えてはみたものの、2年目のジンクスというか、ただの駄洒落ではすまされないというプレッシャーもあり、数はあまりなかったのですが、時事問題（断水、オウム真理教、都市博・青島新都知事、日米貿易摩擦等々）を中心に披露させていただきました。

しかし、時事問題だけにパーティー当日までに情勢が変わってしまう可能性もあったわけです。

聞く側からすれば、短くて軽いタッチのものが聞き易く、素直に笑えるようです。逆に長くて小難しいものは、聞いている途中でオチが見えたり、はじめの方で聞いたオチの伏線になる部分を忘れてしまったりとあまり受けはよくないようで（特にお酒が

回った方には）、単にやっている方の自己満足で終わるということにもなりかねません。

人前に立つのはやはり緊張するもので、途中で何をいうのか忘れてしまっただけとはいけないと白い扇子の裏には、あんちょこをつくり出番を待ちました。

極度の近視+乱視である私は、眼鏡を外してにわかのお面をかぶるとみなさん顔もほとんどみえなくなり緊張感も和らいだきましたが、ついでに扇子に書いていたカンニングペーパーも、全く見えなくなっていました。

にわか師の方に、合間には茶々を入れていただきながら、何とか無事に終わり、皆様からはねぎらいのお言葉やアドバイスをいただきました。

来年は、ものめずらしかったにわかも飽きられてしまうのでしょうか。中止されるのではなく、注視していただけるようにと思っている次第です。

（金川 薫）

第3回 よかネット・パーティ特産品一覧

【特産品名】	【産地】	【特産品名】	【産地】	【特産品名】	【産地】
1 吟醸ゼリー	東京・青梅	18 手作りかまぼこ	福岡	36 いかすみせんべい	長崎・厳原
2 やまごぼうの梅肉漬け	〃	19 カレー焼き	福岡	37 本造 いか塩辛	長崎・厳原
3 馴れ寿司	滋賀・大津	20 サマーオレンジ	福岡・新宮	38 南関あげ	熊本・南関
4 塩昆布 えびすめ	大阪	21 いわしの床漬煮	福岡・北九州	39 はやの甘露煮	熊本・矢部
5 鯖寿司	京都	22 自家製薫製	福岡・天神さま	40 ゆずみつ、ゆずべつばー ポン酢、ゆずこしょう	熊本・矢部
6 麩まんじゅう	京都	23 らしめんたい	福岡	41 あさり	鹿児島
7 菓子 松風	京都	24 豆腐(石釜豆腐)	福岡・石釜	42 鶏ささみ薫製	宮崎
8 大徳寺納豆	京都	25 地鶏のたたき	佐賀・鳥栖	43 川のり	宮崎・椎葉
9 オイルサーディン	京都・宮津湾	26 徳永飴	佐賀	44 にほんはちみつ	〃
10 さいぼし	兵庫・羽曳野	27 沢がにのからあげ	佐賀	45 地鶏炭火焼き	宮崎・都城
11 黒豆の甘納豆	兵庫・丹後篠山	28 甘夏ジュレー	佐賀・呼子	46 塩ゆでピーナツ	鹿児島
12 柿の葉寿司	奈良	29 豆腐	佐賀・唐津	47 豆腐よう	沖縄・那覇
13 洋酒ケーキ	広島・上下	30 カステラ	長崎	48 かつおの醤油漬け	
14 ジャコ天	愛媛・宇和島	31 もちとうもろこし	長崎・島原	49 自家製野菜(大根、パセリ) 味噌、梅干し	
15 いかのぶっかけ	福岡・北九州	32 もどきがんもどき	長崎・大黒市場	50 自家製おから	
16 かまぼこ	福岡・久留米	33 辛子れんこん	〃	51 自家製漬物	
17 珍品かまぼこ	福岡	34 味付きあご	長崎・築町		
		35 豆腐	長崎・壱岐		

第3回 よかネット・パーティ酒、焼酎一覧

【品名】	【産地】	【品名】	【産地】	【品名】	【産地】
52 ビール クラシック	北海道	66 酒 近つ飛鳥	大阪・羽曳野	80 酒 白嶽	長崎・対馬
53 本醸造 津軽だより	青森・弘前	67 酒 ザ宝塚	兵庫・神戸	81 酒 西の関	大分
54 純米吟醸造 名園百齡	〃	68 酒 まぼろし	広島	82 酒 芋原酒	鹿児島
55 秋田銘酒 爛漫・高清水	秋田	69 酒 深山	広島	83 焼酎 魔王	鹿児島・鹿屋
56 酒 一の蔵 超辛口	宮城	70 大吟醸 福徳長	福岡	84 〃 照葉樹林	〃
57 酒 八海山	新潟	71 生酒 大地	福岡・三藩	85 〃 桜島	〃
58 ライスワイン 米	茨城	72 純米本醸造 亀の尾	福岡・宗像	86 〃 勇郷中	〃
59 梨のブランデー しろい	千葉・白井	73 赤米酒 耶馬台卑弥呼	福岡・瀬高	87 〃 さつま大海	〃
60 大吟醸	東京・青梅	74 白いのみ五郎	福岡・犀川	88 泡盛	沖縄・宮古
61 吟醸酒	〃	75 七福神の酒	福岡・久留米	89 泡盛古酒 琉球王朝	沖縄・宮古
62 さわのい昔	〃	76 酒 似花(あえか)	福岡・宇美	90 純米吟醸 上善如水	
63 にごり酒 三千盛	岐阜	77 原酒 白糸	福岡・前原	91 ウイスキー クレスト	
64 吟醸酒 名古屋城本丸御殿	愛知・名古屋	78 酒 富貴乃普	福岡	92 ブランデー XOデラックス	
65 真醸酒 湖東富貴	京都・近江	79 大吟醸 窓乃梅	佐賀	93 ブランデー カミュ	
		80 聚楽太閤	佐賀・唐津		

「地域社会と教育」をテーマに研究発表

地方シンクタンクフォーラム

総合研究開発機構（NIRA）の助成により、昨年度地方シンクタンク協議会の研究機関によって行われた研究の発表会が、5月26日（金）、大阪にて行われました。

今回は、「地域社会と教育」を研究テーマに全国28機関からの研究報告が行われ、このうちの「教育を核とした地域の活性化策」という課題に基づき、当事務所でも助成を受け、山辺が研究報告を行いました。

当所が行った研究は、佐賀地域における地域の交流・学習の拠点をめざして、アジア文化交流センターを設置することを提案したものです。以下に、研究報告の概要をまとめました。

■「一地域の交流・学習の拠点—アジア文化交流センター構想」

- ・ 鎖国時代、長崎から入ってくる西洋の文化・科学技術は、佐賀地域を通り全国へ広がっており、佐賀地域では、アームストロング砲等をはじめとした新しい試みが行われてきた。
- ・ 近年、佐賀地域の住みやすさ、自然環境等の良さ、といった口コミ情報により、アジア地域からの留学生が急増しているが、受け入れる地元では、県や市の国際交流協会、市民による国際交流ボランティア団体などがバラバラに活動をしているという状況にあり、この活動、情報を一元化して提供するシステムが求められている。また、アジアへ進出する企業は、的確な地域情報を求めている。



そこで、現在の留学生、またかつて留学して自国に戻った人、現役の研究者、退官した研究者たちが持っている情報、交流支援活動団体の情報、これらの人的ネットワークをシステム化し、適切な情報の提供、相談サービスを行うセンターの提案を行った。

このほか、人口増加が期待できない地域にとって、定住人口ではない交流人口の促進のため、大学と地域の交流活発化を提言したものの、町に立地する教育機関を活用して生涯学習による町おこしを行っている町の事例研究など、“交流”“生涯学習”をキーワードとした研究報告が多かったように感じました。これら研究成果の報告を受けて、NIRAの永田尚久理事から、「これからのシンクタンクの生き方として、地域の役に立つ即効性を持った地域づくりを提示することが重要であり、そのためには、地域をよく知り、行政担当者からの情報をうまく引き出していくことが必要である」というコメントがあり、フォーラムが終了しました。（歌丸 屋子）

④ フォーラム終了後は、シンクタンク若手交流会

全国から参加した各機関の研究員の中には、このまま解散するのはもったいない、もっと交流をしようという声（口実？）もあり、東北、関東、関西、九州の各機関の若手、元若手20人あまりが堂島界隈の居酒屋に集い、喧々囂々、わいわいガヤガヤと2時間を過ごした。その後、2次会にも繰り出し、各地の生の情報、苦勞話など、本当の意味での交流ができたと思う。めったに顔を合わせることの無い人でも、同じ仕事をしている仲間という意識が強く、こういう交流のための機会がもっとあればと感じた次第である。（山辺 真一）

まちのドクターになることが再開発の仕事

～再開発事業基礎講座～

〈社会の仕組みを勉強に〉

5月22日（月）から26日（土）までの5日間、再開発事業基礎講座（（社）再開発コーディネーター協会主催）なるものを受けに東京へ行った。

以前からそういうものがあるという話は聞いていて、必要があればいつか行くことになるかとは思っていたが、いざ具体的に勧められると、思わずしり込みしてなかなか踏み切れなかった。

コンサルタントらしからぬかも知れないが、そもそも「開発」という言葉にあまりいいイメージを持ってない（「能力開発」のようなソフト的な意味もあるが、私の中では「開発＝乱開発」に近い）ため、「再開発」という言葉に今ひとつなじめない部分がある。それがしり込みのひとつの要因でもあったが、再開発をやらなきゃいかんから講座を受けるのでなくて

も、社会の仕組みの勉強をするというのならいいだろう、と自分を納得させた。それに、今なら何とか一週間くらいは空けられそうだったし、行けるうちに行っておこうと、おそろおそろ申し込んだ。

〈人間の欲望についても学んでおこう〉

講座では受講者は65名で、名簿を見ると下は24歳から上は57歳までおり、行く前は自分だけ若いのではないか（ちなみに27歳）とっていたが、20代も20名程いて安心した。

講義の話のひとつとおりすると、とてもここに収まる量ではないので、良く分かった話と面白かったところだけ報告させていただく。

- ・ 再開発法は土地区画整理事業の考えをそのまま建物に持ち込んだようなもの。立体的な区画整理である。
- ・ 再開発はビルを建てることによって床面積が増える「増床」が基本だったが、過去に行った再開発の再開発や、阪神大震災で倒壊した建物の問題などでは「増床」できないところがあり、新しいやり方が必要となっている。
- ・ プランナーとコーディネーターは、スペシャリストとゼネラリストの違い。プランナーはコメンテーターとして自分の分野から意見を言ってもいい。一方、コーディネーターには沢山の意見をまとめて、事業を前に進めることが求められる。
- ・ 再開発を手掛けようとする者は、人のエゴをまとめるのであるから、心理学、特に人の欲望について良く学んでおくといい。
- ・ 再開発のコーディネーターはまちのドクターのようなもので、まちを健康な状態に持っていくのが仕事。再開発は外科医のような仕事だが、時にはじっくり直す漢方的手法も必要となる。あまりい

じりすぎて副作用が出ると失敗、ということもある。
〈講義はちょっとくらい聞き逃しても大丈夫?〉

5日間、朝から夕方まで全て講義のみ、まさに詰め込み教育といった感じで、結構きつい思いをした(上級には2週間の養成講座もあるようだが)。講義内容を理解した、覚えた、というところまではとても到達せず、最後に試験などなかっただけでも助かった。

しかし講師が毎時間変わり、各々再開発の全体像に一通り触れてからその時間の講義内容に入っていくという場合が多かったため、再開発の大体の姿は分かったように思う。また各講義の内容が縦軸横軸で絡み合っており、ひとつの話聞き逃す、あるいは理解できなかったとしても、他の講義でカバーできる部分が多かった。

あとはもらった重い資料をもう一度めくって復習しておく時間が必要だ。(伊藤 聡)

私の近況

電車の中の風景1

～おじさんは注意し、無視された～

福岡の地下鉄の中での風景である。電車の入り口付近で女子高校生が4～5人で輪を作って、よくしゃべり、高笑いが車内に響き、少し車内の雰囲気をつらだたせていたように感じられた。この時である。女子高校生たちの斜め前に座っていた60過ぎのおじさんが「うるさい。静かにせんか!」と叫んだのである。しかし、女子高校生たちは一瞬口を閉じたかのように見えたが、無視してまたしゃべり始めたではないか。また、おじさんは叫んだ。また、女子高校生たちは一瞬の静寂のあと、しゃべり始めるのであ

る。あとおじさんはあきらめ、苦々しい視線を女子高校生に投げかけていた。

ひと昔前であれば、おじさんから怒られることは本当に恐いことであり、余程理不尽なことでない限りは即座に言うことを聞いていたように思う。今のご時世には「恐いおじさん」はいなくなった(無視される)のか、あるいは聞き分けの良い高校生などはいなくなったのかわからないが、とにかく都会の人間関係の希薄さを感じた一日であった。

(山田 龍雄)

電車の中の風景2

～おじさんは注意し、喧嘩が始まった～

先日東京に行ったとき(再開発基礎講座で)、新宿から中央線の電車に乗った。それほど乗客は多くなく数人が立っている程度の電車で、私はドアのそばに外向きに立った。ドアが閉まる直前、後ろの方から若者(私と同じくらい、25歳前後)が私の前のドアの外、つまりホームの上に空き缶を置いて、すかさず席へ戻った。あつ、と思ったときにはドアが開まり電車が動き出した。何かもやもやしたのを感じていると、後ろに立っていた40過ぎくらいのおじさんが「危ないだろう!」と注意した。すると先程の若者はおじさんに「何を僕に文句言ってるんですか、おじさんだからっていい気になるなよ」といった風に突っかかってきて言い争いが始まり、電車は険悪ムードが漂った。理不尽な喧嘩が始まったなあ、いやだなあ、と思っていると、1人の若者がやってきた。なだめるかと思えば、「僕の連れに何をするんだ!」なんなんだこいつらは。

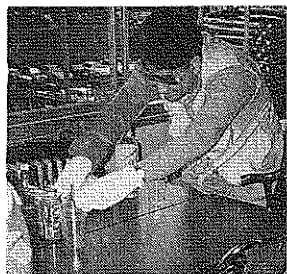
“このままでは収集がつかん、しかも周りはみんな傍観者か、ええいつ”と私は振り向いて若者の肩を叩いた。「俺はおじさんの方が正しいと思うよ」これ

が気合いをいれて何とか出てきた言葉だった。若者の反応は意外と拍子抜けで「あ、そうですか、すいません。」しかしそのあとが気に食わない。「それじゃ多数決ということ。」

とりあえず喧嘩は一段落し、タイミングのいいことにまもなく電車は私の乗り換える駅に着いた。私は「じゃあ」とそこで降りたが、おじさんと若者はそのあとどうなっただろう。(伊藤 聡)

大牟田市で「うらしま太郎」研修会開催

去る5月14日、大牟田市役所で、WAC単位クラブ「長寿社会のまちづくり研究会」の初めての企画・実施により、高齢者疑似体験プログラム「うらしま太郎」研修会を行いました。



今回は、大牟田市の建築士会、市役所の建築担当、福祉担当、保健婦さんを対象とした研修会で、これまでの健康まつり等のイベント形式ではなく、最初に老化についての講義を30分行い、その後3人一組になって、疑似高齢者とそれを介助する人に分けて体験を行う、というやり方で進めました。

市役所を活用した体験プログラムということで、住民票申請用紙に記入してもらったり、役所内の案内版をみるなど、高齢者の立場での使いやすさを感じてもらいました。

住民票については、記入欄が狭く書きづらい、記入欄の文字が小さく読みづらい、案内版は、ベースと文字の色をメリハリのあるものにした方がいいのではないかという意見が出ていたほか、視覚、聴覚の老化再現により、理解力が鈍くなったように感じ

る、新聞を読むのが面倒くさく感じるなど、心理的な面の変化もあげられており、体験した人は百聞は一見にしかずといった感じで、高齢者の不便さを実感されているようでした。

介助についても、自分のペースではなく、高齢者の動作イメージを常に頭に描いておくことが必要、介助者がいると安心感があるなど、高齢者を体験することにより、介助する側の役割についても考える機会となったようです。

今後も、住みよいまちづくり、高齢者理解のため、「うらしま太郎」研修会の企画・実施を行っていきたいと思っています。(歌丸 星子)

能古島の空の下で鶏が元気に走っていた

能古島へ渡り、EM技術を導入している養鶏農家を見学した。EMとは「Effective (有能な)」「Micro-organisms (微生物群)」の頭文字をとった造語で、「有用微生物群」の略である。

備ブラネットアースの藤本英輝さんに話を伺った。自家製造のエサにEMを混ぜて鶏に与える、EMを堆肥として取り込みながら育った雑草を鶏に与えると、鶏の悪臭が消え、鶏のストレスが解消され健康な鶏となり、鶏卵の品質が向上するのだという。出来す

私達より健康？元気にわとり



きた話のようだが、土に与えられる堆肥の正体は生ゴミで、生ゴミ（コンビニエンスストアの賞味期限切れの弁当）とEMが姿を変えて良質な有機肥料となったのである。

通りの両側にいるざっと1,700羽の鶏たちはほぼ完璧に近い無臭の状態で生活していた。その鶏たちの熱い視線を強烈に感じ、少々気恥ずかしい想いをしながらの見学会だった。

「地球を救う大変革」（平成6年8月1日、社団法人日本緑十字社発行）を読むと、悪臭の除去、生ゴミの堆肥化だけでなく、菌の抑制、汚水の浄化をもやっつてのけ、地球に数十鳥をももたらしてくれるEMの頼もしさに一層心を動かされる。（伊藤 加奈）

食 場 日 誌

・4月×日 都市開発研究所の平澤さんに「黄金柑」を送っていただきました。このちょっと小ぶりのきれいなレモン色をした黄金柑は、沼津市の西浦地区の特産で、全国でもこの地区でだけ、それも少ししか収穫できないとのことで、まさに「黄金」のよう。ナイフを入れると爽やかな香りが広がり、なんとも言えないいい気分でした。（と）

・5月×日 小雨の中、能古島の「風庵」に食事に

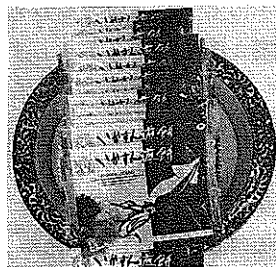


小高い丘の上にある「風庵」船からも見えました

行きました。2階にあがると、ガラスの戸の向こうにはドームや福岡タワーがちょうど正面に見え、とてもいい眺めです。まわりの緑もすがすがしく、ゆったりとした気持ちになれました。いい景色と心のこもったおもてなしにくつろいでしまい、すっかり長居をしてしまいました。（け）

「風庵」連絡先：水谷さん 092-891-5637

・6月×日 パーティにも登場した長崎県下県郡厳原町のいかすみ煎餅は対馬の空港で見つけたもの。バナナチップやえび煎餅などは、数十枚で一袋として売られているものと思っていたが、これ



は2枚で一袋の煎餅が一行に箱に入っていて、上品だなあと買って買った。味はえび煎餅のようだが、一瞬確かにいかすみの香りにつつまれる。真っ黒な煎餅にうっとりしてしまう。（な）

“ワンポイント・ナウ”をつくりました

前回の①②③に加え、今回新たに④⑤をつくりました。ご希望の方はご連絡ください。

- ①失敗しないための「3セク」計画論
- ②公共賃貸住宅総合再生計画（建替事業のマスタープランに係わる事項）策定計画の視点
- ③市町村の将来フレーム設定手法について
- ④地域づくりのための産業政策
- ⑤“モモノの村”構想
—高齢者・障害者施設を、ファクトリーパーク等の組み合わせによって地域産業・先端技術のモデルとして考える—

日田・湯布院・上津江
おいしいもの三昧



花てぼ弁当

“よかネット・パーティ”の翌日、ある先生の湯布院の別荘「枕流亭」へ4人で出かけた(当初は5人の予定だったが、一人2日酔いでダウン)。食べることで温泉に入ることを目的とした旅だった。初日の昼飯は、湯布院へ行く途中、日田の大原神社の裏手にある「大はら茶屋」で花てぼ弁当をいただいた。柄のついた竹籠の中に、山菜や川魚、山芋などが入った料理で、最初からすっきりいい気分になった。緑の中にひっそりとたたずむ枕流亭に着き、さっそく温泉に入りお腹を空かせた後、亀の井別荘内の「湯の岳庵」での夕食に向かった。大分の酒「西の関」を飲みながら、山菜鍋、地鳥の鋤焼きで満腹になったところへ、とどめは豊後牛ステーキ、どれも大変美味しかった。翌日は、上津江村の民宿「小竹庵」(昭和4年に建てられた旧家をリニューアルして地元の奥さん達で運営)で、山女魚の塩焼き、竹の子の酢味噌あえ、旬の野菜やてんぷら等々を食べた。美味しい大根の漬物のせい、良く晴れた天気のおかげ、豆ごはんを3杯もおかわりしてしまった。枕流亭は風情もあり、亀の井別荘の温泉に入って、美味しいものを食べて、楽しい2日間だった。最近、お腹回り、腰回りが気になるのは私だけだろうか。(歌丸 星子)



「21世紀をめざす
世界の教育
—理念・制度・実践」

権藤與志夫 編著
九州大学出版

当社と権藤先生の出会いは、アジアス九州(九州北部学術研究都市構想)の最初の調査が始まった昭和63年にさかのぼる。比較教育学という学問分野を知ったのはその時であるが、覚えているのは、アジアの教育、その背景にある文化とか生活が、アジアの各地域で相当に違うということであった。

先生の長年にわたる研究活動の中で、様々な地域を訪問され、日本に限らず、アジア、世界の比較教育学の研究者のネットワークは相当なものと聞いている。

今回出版されたこの本は、先生の研究分野である教育の世界的な潮流が集成されたものであり、民族問題、異文化理解などの問題に関心のある人にとっては、その国々、その地域々の教育制度を知ることによって、人々の価値観、文化を少しでも知ることができるという意味でおもしろいであろう。

例えば、ヨーロッパ統合の基盤は、経済、財政などに限らず、教育訓練分野が重視されつつあり、それは「ヨーロッパ共同体市民」の教育のための「ヨーロッパ学校」という実績が背景にあると述べられている。また、少数民族の危機感、中央文化の波であり、寄らば大樹の蔭、主体性の喪失による民族の否定的アイデンティティの出現であり、これを防ぐ

ための民族教育は、親や祖先から教えられたものの中から、生き方の様式、人生の意義や生きがいを自ら感じとること、文化の伝承が真の意味の民族教育と述べられている。この他にも、韓国、タイ、インドネシア、中国などの国々の教育が紹介されている。

(山辺 真一)



「おばあさんの
植物図鑑」

文 齊藤 政美
語り 椎葉クニ子
葦書房

日本人の「ふるさと通信」みたいな本である。たとえばタラノキについては、「ダラはイゲダラ・ホンダラちゅうて、小さいうちは全部イゲダラ。それちゅうのが、小さいうちはイゲ（トゲ）が生えんと取って食われるから。私たちの背の高さまでは全部イゲダラ。そして、大きくなって、ナタなんかで倒さんといかんようなのがホンダラで、葉にもボク（木）にもイゲがないんですよ。」と語られている。つまり、若葉のうちにはトゲで保護しているが、大きくなるとトゲがなくなるという。極めて当たり前のことなのだが、この話を椎葉クニ子さんから聞いていると、誰でも「この平凡で非凡な自然」に感動をおぼえるに違いない。

この本は、読み始めたらトットトットと前へ進むように読み続ける。その興味の源泉は、椎葉さん夫妻の山村の暮らしの視点から語られているからであ

る。農業にとって役立つか、邪魔になるか、食べられるか、毒になるのか、薬になるのかなどと、植物を通した一言一言の向こうに山村の風景が伺える。

また、椎葉さんのところへ行って、山菜料理をいただきながら、椎葉村の語りを聞きたいものである。

(糸乗 貞喜)

編集後記

■今九州では「いじめ」や校舎の破壊など、学校のことが新聞をにぎわしています。それとは逆の話を福島県の三春町で聞いてきました。日本都市問題会議のシンポジウムで行ったのですが、町へ入って第一番に感じたことは、役場は古びているが、他の施設は全部すばらしかったことです。中でも中学校は、各学校ごとに違う建築家に設計してもらって、すばらしいものが建っていました。子供たちに学校を大切にす気持ちを持ってもらうためにも、個性のない施設ではなく「地域の思いを込めたハードも大切」と感じた次第。(い)

よかネット NO.16 1995. 7

(編集・発行)

㈱九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-962-1224

東京事務所

TEL 03-3226-9130